## 目指せ！ 世界ジオパーク

# 隠岐魅力UP

## 島根

## すっきり ワイドに きょう3ページ

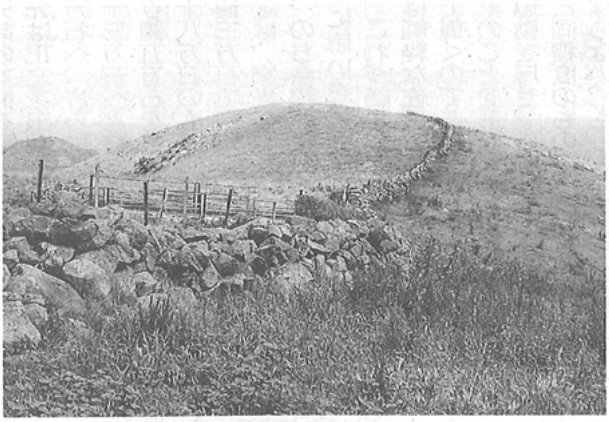
# 「牧畑」自然と知恵の結晶

隠岐島前では、まるで〝島まるごと牧場〟と言ってもいいほど、島内のあちこちで放牧中の牛や馬に出会えます。この隠岐での放牧は、400年以上も前から存在していた「牧畑」という制度に起源があります。

牧畑とは、文字通り牧の畑。火山島で平坦地が少なく、土地も肥沃ではない隠岐で食糧を自給するために編み出された独特の農法で、牛馬の放牧と畑作を4年周期で輪転させます。牧を四つの区に分け、各区で年の一定の季節には畑として作物（大豆・小豆・麦・粟・稗など）を作り、それ以外の期間は放牧。土中の有機物を増やすイネ科植物と、窒素を固定して土を肥やすマメ科植物を交互に育てること、また、栽培で消耗した地力を休閑中に放牧する牛馬の糞尿で補うことで土壌の生産性を維持するという、世界的に見てもユニークで合理的な農法です。

そして極めて重要な特徴は、放牧地の共同利用。畑には私有権がありますが、牧はみんなのもの。地域住民なら土地所有権の有無に関わらず誰でも自由に放牧できるのです。

北前船による海上交易が栄えて貨幣経済が浸透するにつれて牧畑は減少し始め、1960年代後半には完全に姿を消しましたが、牧畑由来の土地利用慣行は今も残っています。牧は「公共牧野」とされ、牛は耕作用ではなく肉用繁殖牛になりましたが、放牧地を共有し共同管理していくことは各町村の条例でも規定されています。



牧畑の名残の石垣。知夫村では名垣（みょうがき）と呼ばれる＝知夫里島観光協会撮影

海士町ふるさと案内人の榊原信也さんいわく、「牧畑の背景にある精神的な面にも目を向けたい」。牧畑時代、牧を区切る垣の修繕などは地域の共同作業でしたが、牛を飼っていない人も参加を強制されていたそうで、「牛がいる山をみんなで守っているという意識があり、それが人々をつないでいたのではないか。また、現代の海士町のようにIターン者でも畜産に参入しやすいのは、地元民が昔から放牧地に私有意識を持っていないことが要因として大きいと思う」。

西ノ島町では、牧畑の価値を考えることで、人同士の結束や共助の大切さを見直そうという取り組みが始まっており、任意団体「牧畑を後世に伝える会」は、牧畑の名残として残る石垣の整備や牧の草刈りといったボランティア活動を行っているそうです。

厳しい地理的条件と、運命共同体として共に生き抜いていかねばならない島民としての宿命。そこから生まれた牧畑という〝大地との関わり方〟は、隠岐の自然と知恵の結晶であり、「隠岐ジオパーク」に内在する重要な地域資源の一つと言えます。

なお今回は、「隠岐牧畑の歴史的研究」（三橋時雄著、1969年）を主な参考文献としました。ご興味ある方はぜひご一読を。

（海士町役場総務課情報政策係　岡本真里栄）